

トピックス

第3期・太極拳まるごと勉強会始まる

第3期の「太極拳まるごと勉強会」は15名の参加者を得まして4月15日に第1回を開催しました。月1回、来年3月まで行う予定です。すでに開催中の「なんでも勉強会」と併せて、資料の作成もけっこう大変ですが、少しでも皆さんに楽しんでもらえるよう、また満足していただけるよう鋭意努力中です。

27年度東京都支部会員登録完了

担当教室の27年度支部会員登録を完了し、支部へ会費を納入しました。

瑞江鶴の会 38名、東大島鶴の会 38名、亀戸SC教室 12名、合計 88名

閑人閑話

魯迅の木蓮

魯迅より贈られしとふ木蓮の花いまも咲く円覚寺の庭

先月号の『旅を詠い拳を詠む』欄で、上記の歌をご紹介しましたが、鎌倉在住の友人 T 氏のご案内で3月18日に北鎌倉の円覚寺と東慶寺へ行ったときに作ったものです。

円覚寺は1282年に北条時宗が元寇の役の死者を彼我ともに弔らう目的で、中国(宋)から無学祖元(仏光国師)を招いて創建した古刹で、臨済宗円覚寺派総本山です。山懐に抱かれた広大な寺域に、山門、仏殿、塔頭などの堂宇が一直線状に並ぶ宋風伽藍様式で配置されています。その奥まったところに、時宗の廟所である「仏日庵」があります。その庭に植えられているのが昭和8年に魯迅が寄贈した木蓮と泰山木です。

80年以上たった今二本とも大樹となって、おりしも木蓮は乳白色の大きな花をいっぱい元気に咲かせ始めたところでした。【右】

魯迅(1881~1936)は『阿Q正伝』などで知られる中国の大文学者です。彼は弟の周作人とともに来日して、日本語や医学を勉強しました。帰国後弟とともに、中国の近代化のために、雑誌『新青年』などを舞台に、思想、言論、文学の面で活躍しましたが、日本に倣って中国の独立と近代化を進めようとした彼らにとつ

ては、満州国建国に続く日本軍による中国侵攻が深化する中で、たいへんな葛藤があつたと想像されます。魯迅【左】は1936年(昭和11年)志半ばにして病没しましたが、弟の周作人は日本に協力した漢奸として戦後処罰され、さらに文化大革命でもう一度糾弾され、1967年に失意のうちに死亡しました。

二人とも、日本に多くの友人を持ち、中国の近代化、民主化のために頑張ったのですが、二人は墓の下で今の中国を、また日中関係を、どう見ているのでしょうか。

昭和8年に魯迅の植えた木蓮が今もなお花を咲かせているということから、いろいろなことを考えさせられてしまいました。

魯迅は数々の「名言」を残していますが、心に留まったものを三つだけご紹介します。

◎造物主に非難すべき所があるとしたら、神があまりに無造作に生命を作り、あまりに無造作に生命を壊す点だろう。

◎墨で書かれた虚言は、血で書かれた事実を隠すことはできない。

◎平和と言うものは、人間の世界には存在しない。しいて平和と呼ばれているのは、戦争の終わった直後、またはまだ戦争のはじまらない時を言うに過ぎない。



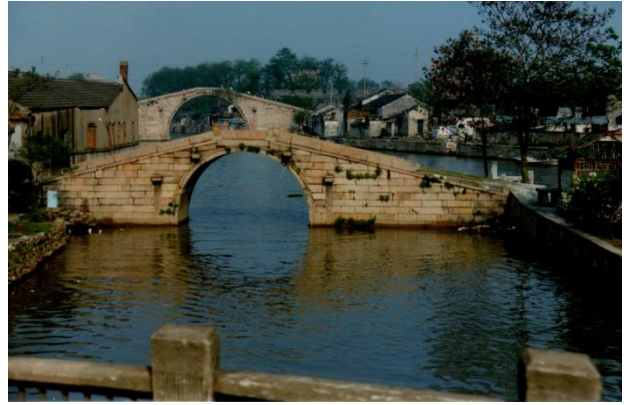
第9回 江南 光と陰

江南とは、江（長江）の下流域の南岸を指すのが本来の意味だったのですが、一般的にはより広く、北岸を含めての長江下流の豊かな平原地帯をさす言葉として用いられているようです。江南を詠った名歌は多いのですが、まずは水の都蘇州を詠った明時代の天才詩人高啓（1336～1374）の歌からご紹介します。

尋胡隱君	胡隱君を尋ねる	高啓
渡水復渡水	水を渡り 復た水を渡り	
看花還看花	花を見て 還た花を見る	
春風江上路	春風 江上の路	
不覺到君家	覺えず 君の家に到る	

この詩はいかにものどかな水郷の街蘇州をのびやかに詠っていますが、高啓は明の太祖に重用されていたの

にかかわらず、あるとき太祖を諷刺する作品を書いてしまい、その罪で腰斬の刑に処せられました。腰斬の刑とは、人体を腰のところで切り離す残酷な死刑で、中国古代から続いていた方法です。



【上；蘇州の運河と橋 1987年4月写す】

蘇州といえば杭州も忘れるわけにはいきません。杭州の西湖の美を詠った、蘇軾（蘇東坡）（1037～1101）の名詩をご紹介します。蘇軾（蘇東坡）は北宋時代の政治家であり、詩人、書家でした。副知事として杭州にいたときの作品です。西湖に彼が築いた「蘇堤」は、唐時代に白樂天が築いたとされる「白堤」とともに現在でも西湖の名所の一つです。

飲湖上初晴後雨	湖上に飲す初め晴れ後に雨ふる	蘇軾（蘇東坡）
水光瀲灩晴方好	水光瀲灩として晴れてまさに好く	瀲灩；れんえん・きらきら光るさま
山色空濛雨亦奇	山色空濛として雨もまた奇なり	空濛；くもう・霧雨で薄暗いさま
欲把西湖比西子	西湖を把って西子に比せんと欲すれば	西子＝西施（傾国の美女）
淡粧濃抹総相宜	淡粧濃抹総て相宜し	薄化粧も厚化粧もみなすばらしいの意

このように西湖の美しさを楽しんでいたものが、その後政争に巻き込まれて幾たびか左遷され、最後にははるか海南島に流されます。ようやく許されて都へ戻される途中で客死しました。

江南を詠った歌で最も有名なのは晩唐の詩人杜牧（803～852）の文字通りの『江南春』でしょう。

江南春	江南の春	杜牧
千里鶯啼緑映紅	千里鶯啼いて緑紅に映ず	
水村山郭酒旗風	水村山郭酒旗の風	酒旗；酒屋（酒を供する店）の目印の旗の意
南朝四百八十寺	南朝四百八十寺	
多少樓台烟雨の中	多少の樓台烟雨の中	多少；たくさんの意 烟雨；けふるような春雨の意

江南の春の情景を詠った名歌ですが、じつは第3句に作者の深い感慨が込められています。つまり漢王朝が崩壊した後、中国は分裂して、三国時代、五胡十六国、さらに南北朝時代と混乱の時代が続きました。

「隋」が南朝の最後の王朝「陳」を滅ぼして再び全土を統一します。この詩で言う南朝は、建業（金陵・南京）に首都を置いた四つの王朝を指していますが、とくに「梁」（502～557）の武帝時代は政治も安定し、佛教が隆盛を極めて、建業にはお寺が林立していたこと、を指しています。杜牧はその300年後、春景色のその地に立って、歴史の栄枯盛衰に思いをはせているのですね。いわば春愁を詠った名歌とも言えます。

南朝の最後の王朝「陳」を詠ったのが、同じく杜牧の『泊秦淮』です。秦淮（しんわい）とは南京市内を

流れる川の名前ですが、同時にそこにあった、また今もある、南京有数の歓楽街を指す言葉でもあります。

泊秦淮

烟籠寒水月籠沙
夜泊秦淮近酒家
商女不知亡国恨
隔江猶唱後庭花

秦淮に泊す

烟は寒水を籠み月は沙を籠む
夜に秦淮に泊して酒家に近し
商女は知らず亡国の恨を
江を隔てて猶唱う後庭花

杜牧

川面に霧がかかり、月が岸辺を照らしているさま
酒家；商女を置く妓楼の意
商女；妓女の意
後庭花；歌の名前

「陳」の最後の王「**陳叔宝（諡名；後主）**」（在位 583～589）は、政治は官僚に任せて、豪華な宮殿に美女をはべらせてただ享樂と浪費にふけり、ほとんど闘うことも出来ずに「随」に敗れて、「後主」という不名誉な諡名で後世に知られる暗君でした。

自ら作ったとされる哀愁を帯びた「玉樹後庭花」がおよそ 250 年の時を隔ててなお歌い継がれているさまを、杜牧は哀切の想いをこめて詠っているわけです。ちなみに後庭とは宮殿の中の皇后や妃、女官などの住む場所、玉樹とはたとえとして容貌の優れた人(女性)を意味する言葉です。

パソコンで検索したら、思いがけずも、その歌詞を見つけることが出来ましたのでご紹介しますが、やはり自分の愛妾の艶姿を歌い上げた内容でした。



【上；現在の秦淮歓楽街の夜景】

玉樹後庭花

麗宇芳林對高閣
新粧艷質本傾城
映戸凝嬌乍不進
出帷含態笑相迎
妖姬臉似花含露
玉樹流光照後庭

玉樹後庭花

麗宇 芳林 高閣に対し
新粧の艶質はもとより城を傾く
戸に映り嬌を凝らして乍（たちま）ち進まず 嬌を凝らして；しなを作つての意
帷を出で態を含み 笑って相迎う
妖姬の臉は花の露を含めるに似たり
玉樹 流光 後庭を照らす

陳叔宝（後主）

麗宇；壮麗な宮殿の意
意識；化粧した艶で姿にめろめろだ
意識；帳を出ると媚びを作つて…
流光；月の光の意

ところで、唐の都長安から見れば、当時の江南はまだ未開の地であり、蛮族や異民族の多く住む土地でもありました。そのため、しばしば、罪を問われた政治家の流刑の地であり、また官僚たちの左遷の場所でもあったわけです。江南ののどかな風土、豊かな自然とは裏腹に、失意や望郷の名歌が多いのはそのせいでしょうか。

中唐の詩人**柳宗元**（773～819）は長安生まれの秀才で若くして科挙に合格し、新進気鋭の官吏として活躍しましたが、保守派との政争に敗れて、湖南省の永州の司馬（名前だけの閑職）に左遷されます。10 年後いったん長安に戻ることが出来ましたが、再びさらに僻地の柳州（広西壮族自治区）に流されて、46 歳で客死します。永州で作ったのが、ご紹介する『江雪』です。彼の失意の心象風景として読むとたいへん胸に迫るものがあります。また、この詩題による『寒江独釣図』の山水画は、後世多くの画家によって描かれています。



【上；国立博物館蔵・重文 南宋・馬遠】

江雪

千山鳥飛絶
万径人蹤滅
孤舟蓑笠翁
独釣寒江雪

江雪

千山 鳥飛ぶこと絶え
万径 人蹤滅す
孤舟 蓑笠の翁
独り釣る寒江の雪

柳宗元・中唐

千山；山々の意
人蹤；じんしょう・ひとの足跡の意
蓑笠；さりゅう・蓑を着て笠をかぶつた
寒江；固有名詞ではなく、冬の川の意

アーカイブス「雲の手通信」(再掲・昔のコラム)

おかげさまで、この「雲の手通信」も2004年4月の創刊号から、10年を超えるまで続けることが出来ました。各教室の会員にも、かなり新しい方が増えてまいりましたので、アーカイブスと言うとちょっと大げさですが、昔の記事の中から、とくに新しい読者の方々に読んでいただきたいものを選びまして、これからしばらくの間、再掲してゆきますので、よろしくお付き合いください。必要に応じて、青字で現時点での注釈を挿入します。まずは創刊号から――。

けんこうもうごころく 健康妄語録

中国人が太極拳に熱心な理由 【2004年4月 第1号】

中国ではどこの町でも公園や空き地で毎日おおぜいの人々が太極拳や気功をやっている風景に出会います。私が太極拳を始めたのもその風景に魅せられたからです。

最近ある会合で「どうして中国人はあんなに太極拳に熱心なのですか？」と聞かれましたので、「それは健康保険が無いからです。」とお答えしました。これは半分冗談、半分本気の回答です。つまり、中国で健康保険とか厚生年金とかの恩恵に浴しているのはせいぜい2～3億人だけ。後の10億人の人は自分で自分の健康、老後の生活を守るしかすべがありませんので、セッセと毎朝太極拳に励んで健康維持に自助努力している、というのが私の補足説明でした。

ところでまじめな話、中国では2000年以上の昔から各種の健康法(導引、吐納、練丹など現在で言う「気功」)があり、また伝統的な医学の体系も確立していました。中国の伝統医学は今で言う「ホリスティック医学」ですから当然人間の生命力を養う気功とは車の両輪のようなものです。自ら健康維持に努力したうえで、足らざるところを医療や薬が補うというのが基本なのですね。

「日本では健康保険制度が完備しているので幸せですね」と言われましたので「そりゃ逆ですよ。健保があるから不健康、不幸せになっているのが日本じゃないですか」とお答えしましたが、この妄論の続きは次号で――。

江戸名所図会・塗り絵展のご案内

主催；大江戸熱愛倶楽部

日時；5月10日(日)～16日(土) 【16日は15時までです。】

場所；森下文化センター1階ロビー 【9時～22時開館】

都営大江戸線・新宿線「森下駅」下車徒歩8分

テーマ；「鬼平犯科帳に登場する江戸名所図会」 【小生は「内藤新宿」(下)を出展】



甲州街道の宿場「内藤新宿」の景です、左上は旅籠、それも飯盛女を置く旅籠です。右上に芭蕉の「季節候の来ては風雅を師走かな」と讚があるように、4人組の季節候(門付け)がいます。その左の二人組は魚屋。道の真ん中を右(西)へ向かう親子と荷物持ち、右からは將軍様への献上品を担ぐ二人と警護の侍、右奥は餅つき、野良犬に、按摩さんなどなど、師走の情景が細かに描かれています。実際の作品はA3版です。【原画；長谷川雪旦】